

(論 文)

19世紀前半期アメリカの家庭向け書物の中の動物と家族

—「父親」の表象に焦点をあてて—

白石（那須）千鶴

キーワード

動物愛護 家庭向け書物 「近代家族」 「父性」 「子ども」

はじめに

動物が児童書に登場するのは、今日の私たちの社会においてもよく見受けられる事柄である。19世紀のアメリカで多数出版されていた子ども向け書物をはじめとする家庭向け書物には、動物に愛情を持つことを奨励する記述が多数見出される。こうした動物愛護のメッセージが、「近代家族」の規範とともに家庭向け出版物の中に込められていたことは、しかしながらこれまでの家族史研究では語られて来なかった。本研究では、本稿に先駆け家庭向け書物に記述されていた動物愛護のメッセージを「近代家族」の規範との関わりから論じてきた。本稿ではさらにそうした家庭向け書物の中に見出される「動物や自然について語る父親」に焦点を当ててみたい。

1. 家族史研究の中での「父親」

アメリカの家族史研究は、「新しい社会史」の分野で1960年代から盛んに行われ、多くの研究成果があげられてきたが、その中で「父親」についての詳細な研究は、家族史研究の層の厚さから比較すると驚く程少ない。なぜ家族史研究の中で父親だけが目を向けられなかったのか、あるいは忘れ去られてしまっていたのか—そうした問いとともに1990年代に入り、「父性」が「男性性(masculinity)」の研究とともにようやく扱われるようになり、最近注目され始めたところである^{註1}。他方、これまでの家族史研究で「父性／父権」が全く議論されて来なかったという表現をとると、それは正確ではない。むしろ「父権の衰退」という形で取り上げられ、それが「近代家族」の誕生の大きな鍵となったことも、家族史研究の重要な側面である。そこでこの章では、これまで「父性」についての研究がなされて来なかった原因として指摘されている「父権の衰退」、「領域論」、さら

1

に新しい子ども観の登場の三点から「父親」不在の家族史研究の抱えてきた問題点を整理するとともに、「動物や自然について語る父親」の表象を取り上げる議論の位置づけを提示したい。

アメリカの家族史研究で初期の頃に多数成果があげられた植民地時代の家族をめぐる研究では、「父親」は家族の教育者、供給者、道徳的指導者として君臨し、家庭の中で中心的位置を占めていたとされている。ピューリタンのリーダーたちは、女性を道徳的に劣る存在と見なす傾向を強く持

しらいし (なす) ちづる：中部大学 兼任講師

っていた為、「母親」は子どもが間違った方向に傾斜するのを放任しがちであると危惧し、むしろ「父親」の方が子どもの教育者として適任者であるとするメッセージを積極的に発信していた。男性は家庭の財産や子どもの労働についても管理統率し、妻や子どもに対して大きな経済的影響力を持つべきとされていたことが論じられてきた。植民地時代の「父親」たちは、こうした強大な「父権」を行使していたと解釈されてきた²。

家族の中心であるべきとされた植民地時代の「父親」の存在は、しかしながら19世紀初頭の経済および社会の変化によって家族の「周辺」に締め出され、1850年までには「父権という概念は、アメリカの家族の中で殆ど消滅した」³と歴史家に語られるまでに軽視されてしまう。これは、産業化と都市化が進む19世紀アメリカ社会で、生産の場が家庭の外に移されるとともに父親が供給者としての役割のみに従事することを余儀なくされた結果、道徳的権威者として家族の中で子どもに影響力を行使する立場を失っていった為と説明されてきた。「父親」が家庭の中で存在感を持たなくなったなら、その存在を研究対象として取り上げる必要性も縮小してしまうのは無理もない。こうした家族史研究での「父親」の不在化は、さらに19世紀の家族史研究の成果によっても加速される。それは、歴史家たちが「近代家族」の研究において「領域分業 (separate sphere)」の概念を採用し男性を「公的役割」を担う存在としてのみ捉える傾向に陥った為である、と次のように端的に指摘する議論が最近なされている。

独立革命期以降の中産階級の家族を取り上げた家族史研究家たちが、19世紀初頭からアメリカで大量に出版され始めたさまざまな育児書・助言本等の家庭向け書物の中に盛んに議論され社会に浸透していった概念の存在を指摘し、それを男女の役割分業に基づく「領域論」と名付け議論の中心に据えたことは、家族史研究のみならず女性史研究に大きな刺激を与えた。その概念をめぐる研究が、「男性の領域」、「女性の領域」を構築していった過程を詳述する膨大な成果を生み出していた。女性と子どもが生産の場から切り離されると、男女の役割を家庭の外と内とに分ける「近代家族」の規範が提唱され、家庭は消費と子育てを行う「私的な領域」となり、その「私的領域」に女性が従事し、男性は家の外での「公的領域」で経済活動に専念することによって家族を養う供給者となることが「自然」であるとするメッセージが大量に発信され人々に影響を与えていたことが議論されていったのである。こうした研究において男性を「公的な存在」としてのみ捉える単純化が、「私的領域」である家庭の中での「父親」としての限られた生活を研究題材にすることを捨象していったのだという。⁴

こうした男女を「公」と「私」の異なる領域に配置させることが「規範」として提唱されてきた19世紀の「近代家族」では、経済的变化に伴って父親が子育てに関わる時間も子どもの統率に有効な手段とされた土地も喪失し、家庭は女性が中心となって切り盛りすべき場と捉えられていき、歴史家たちに「家庭礼賛 (cult of domesticity)」と評される家族の価値観が構築されていった。こうしたことも男性が家庭内での支配の地位を女性に譲ることになり、「父権」を喪失していったと、これまでの家族史研究で論じられている。⁵

2

19世紀のアメリカの家族に与えた重要な影響は、こうした「父権」を軽視する価値観だけではない。当時ヨーロッパからもたらされた啓蒙主義とロマン主義が子どもの評価を大きく変え、新しい子ども観が子育ての規範に変化をもたらしていた。例えば、子どもを理想的で独立した存在に成長する過程にあるものと捉え直し、アダムスの原罪説から行われていた誕生時洗礼の習慣が次第になくなり、厳格主義に基づく子どもへの厳しい管理の必要性も不要とされるようになると、子どもを拘束するような家父長的専制は、むしろ障害と見なされるようになっていった。⁶

アメリカのこれまでの家族史研究の成果を上記のように振り返ると、「父親」が不可視化されて

きたのには、19世紀当時に流布していた家族の規範だけでなく、それを「再発見」した歴史家たちの視点にも原因の一端を帰すことができる。「父権の衰退」が強調され「父親」に代わって「母親」の支配する「避難所としての家庭」が無垢なる存在である子どもを愛情深く育てる「私的領域」とされたことを詳述する研究の蓄積は、植民地時代の「強権的な父親」は消滅すべきものとする前提に立ちアメリカの家族の中から「父権」の存在を覆い隠す偏向を無意識のうちに抱えていたのかも知れない。はたして19世紀のアメリカの家族では、本当に「父親の権威」は消滅したのだろうか、一こうした新たな問題意識に立つことも、今後の家族史研究には可能であり必要でもあろう。例えば、実態としての家族の中の父親を分析する為に、当時の家族間で交わされた書簡の分析から、これまで「衰退した」とされてきた「父権」の問い直しを行う研究も出ている⁷。

家族史研究のこうした動向の中で、「動物や自然を語る父親」に注目することはいかなる意味を持つであろうか。本稿で使用する史料は、従来の家族史研究で頻りに採用されてきた19世紀の家庭向け書物である。その中で、とくに男性作家による子ども向け書物と父親向け育児書を取り上げ、動物および自然の著述でなされる父親の表象を分析しようとするものである。家族史研究で登場することが少ないとされた「父親」を動物や自然にかかわる著述の中で取り上げることにより、いかなる「父親」の姿を映し出すことができるであろうか。不在とされた当時の家庭内において、はたしてどのような「父性」を持つ存在として表象されているのか、以下に論じていく。

2. 子ども向け書物の中の動物と「父親」

19世紀前半から多数の子ども向け書物を執筆したジェイコブ・アボット (Jacob Abbott, 1803-1879) は、*Mary Bell*と題する本の前書きで「人生の早い段階での道徳的感性の発達は、形式的な教訓よりもはるかに共感や影響力のある具体的事例によって育まれる」として次のように記している。

もしひとりの少年が、ある春の日に飛んで来るコマドリに優しく語りかけながら餌を与える父親の姿を見たなら、すぐさまその少年の心にその小鳥や他のすべての生き物に対する愛情がわき上がるであろう。…中略…他方、もしその父親が、その小鳥にえさを与える代わりに銃を持ち出すなら、その少年はその小鳥を撃とうとする父親の衝動に共感を受けることになるであろう。…中略…その影響下で育っていくと自分の支配下に置いた弱き存在全てを殺したり危害を加えたりする性癖を身につけてしまうであろう。⁸

こう語るアボットは、当時女性が家庭向け小説の著者の多数を占める中で、子ども向け書物を次々と執筆し、シリーズ化もさせていた。そうした作品の中で犬、猫、小鳥、リス、などさまざまな動物を登場させることは定番となっていたといえる程である。彼が動物を使って著していたものからとくに動物と「家族」の規範の両者が関わる場面を取り上げると少なくとも次のような三つのパターンが見出せる。ひとつは、動物を主体として家族の物語が構成されたもの、二つめは動物に愛情をかける父親の姿を描く物語、三つめは、父親が小動物について語る物語である。ここではこれら三つの形で描かれた動物にまつわる物語を取り上げて、そこに描き出される「家族像」および「父親像」を分析してみたい。

*Rollo Learn to Read*の「バニー」と題される章は、動物の親子の話で構成された家族の物語の好例である。「リス夫妻」と名付けられた夫婦は、子どもを4人持つ文字通りのリスの夫妻であるが、その4人の子どものうちバニーという末娘は、時々意地悪をするという問題をかかえていて両親を悩ませていた。「お父さんとお母さんは、どうしたらバニーを兄姉たちに優しくする事のできるい



図1 Rollo Learn to Readの表紙より

い子に育てられるか考えて幾晩も寝られずにいた」という程である。ある日、両親が食べ物を探しに出かけている間に、三人の子どもたちがバニーにいじめられ悲しい思いをしたという出来事がおこる。いよいよバニーに意地悪をやめさせる事を、その両親は真剣に話し合い、父親は次の朝、バニーを散歩に誘い、お腹いっぱい木の実を食べさせたあと、高い木の上に連れて行き、彼女の体がすっぽり入る程の穴に入れてひとりで過ごさせるという罰を与える事にするのである。取り残されたバニーは、日が暮れるまでその木の上でお父さんが迎えにきてくれるのを待つのだが、やがて暗くなり雨も降り出すとともにたまらない孤独感と悲しみを味わい、いかに自分が兄姉たちに悪い事をしてきたか、反省するところで父親が再び現れ、バニーを連れて帰り皆で仲良く夕食のテーブルにつくという物語である。それ以降、バニーは意地悪をしたくなると、あの高い木の上の穴の中で過ごした時の孤独感をその穴の中の暗闇とともに思い出し、いい子にする事ができるようになり、両親も大喜びする所で話が結ばれている。⁹

意地悪な末娘を教育するこのリス一家の物語で注目したいのは、優しい子どもに涵養しようと心を砕くのが父と母の両方である点、さらに躰の為に罰を与える「父親」のやり方に細やかな配慮が描かれている点の二点である。意地悪なバニーの問題を「父と母」の二人が寝ずに考える姿が、この短い物語の中で繰り返し語られ、子どもの養育に母親だけでなく父親も深く関わる姿が描き出され提示されているのである。さらに躰の為に子どもに罰を与える父親が、まず「満足するまで木の実を食べさせ、なぜ罰を与えなければならないかを語ってから優しく抱きかかえて」高い木の上に連れて行くという描かれ方にも注目したい。ひとりでは降りて来られない程の高い木の上に連れて行き置き去りにするのも注意深い愛情がかけられている事が記述されているのである。子どもの優しい心の成長に配慮し必要があれば罰を与える「愛情深く理性的な父親像」が子どもに興味を引き易いリスの姿で描き出されているところが非常に興味深い。

4 アボットの物語で動物と家族の規範の両者が描かれる二つめのパターンとして親が子どもに動物愛護を論ずる場面には、さらに明確に「愛情深い父親」の姿が読み取れる。「子猫の扱い方」と題する章は、ロロの友達のジェームズという少年が父親から子猫をもらう物語である。「ジェームズ、見せたいものがある」と語りかけた父親は、隣の部屋から子猫を入れたバスケットを注意深く両手に抱えてジェームズのところにやってくるが、「見せて！見せて！」とそのバスケットを下から引っ張ろうとするジェームズが落ち着くと初めてそのバスケットを椅子の上に置く。布が被せられたそのバスケットから、ジェームズの父がその布を優しくとり、中にいる子猫をそっと見せるのである。子猫はびっくりした様子で丸くなり怯えたように見上げている。「お父さん、僕に抱かせて！」

という息子の言葉に父は「優しくなさい」と注意をして許可をするが、子猫は近づいて来る子どもの手にますます怯えてするとバスケットから逃げ出してしまふ。子猫に向かって両手を広げて追いかけてながら「捕まえて！捕まえて！」とジェームズは騒ぐのだが、父は子猫が逃げ込んだ部屋のドアを静かに締めて「いいかい、ジェームズ。子猫がどんなに怯えていたか見たらどう。子猫はお前が傷つけるのではないかと恐れているんだ。数日間、子猫を優しく穏やかに扱って決して捕まえようとしなければ、お前が友達だとわかってくれるから怖がらなくなるよ。だが反対に、乱暴な振る舞いをすれば、子猫はずっと馴れさせてくれないよ」と言っていさせるのである。このように子猫の適切な扱い方を優しく諭す父親とともに、自分本位な幼い子どもの姿がさらに次のように細かな描写で描き出されていくのである。

ジェームズの父が息子と子猫を置いて部屋を出たあと、その幼い少年は何とか子猫に近づこうと躍起になり父親の言いつけを忘れて追い回してしまい、子猫は屋根裏部屋に逃げ込んで姿を隠してしまう。ジェームズが、帰宅した父親にその日一日子猫に対して行った乱暴な行為を正直に語り「これで僕はもう二度と子猫と仲良くなれないの？」と悲しげに問いかけるのに対し、父親は「そんな事はない」と答え、「愛情と優しさで」やり直す機会を提案する。屋根裏に隠れてしまった子猫を「今日お前がした事と全く反対のやり方で連れ戻してあげる」と優しくその父親は提案し、同時に「子猫から信頼されるよう優しくすること」を約束させるのである。

ジェームズの父親はミルクを入れた小皿を屋根裏部屋の戸口にそっと置き、そのまま静かに階下へ戻り一晩それ以外は何もせず待ち、翌朝子猫がミルクを飲んだ事をその空になった小皿で確認する。そのとき、そっとあたりを見回すと子猫が入り口近くまできていた事に気付くのだが、すぐさま子猫に近づこうとするジェームズを制止して、優しくなだめるような声で子猫に呼びかけるだけで再びミルクを入れた小皿を置いてそっと階下に戻り、その繰り返しで子猫が出てくるまで待つ事を息子に時間をかけて教えている。さらに子猫が手の届くところまで出て来ると、今度はミルクを飲む子猫の背中をただ撫でるだけで捕まえようとはしない父に、「もう子猫を二度と捕まえるつもりはないの？」とジェームズが問いかけるまで忍耐強く子猫に接する父親の姿が描写されているのである。¹⁰

ジェームズの子猫は、父親の粘り強く優しい扱いのお陰で再び幼いジェームズのもとに現れ、一緒に遊ぶまで馴化されるのだから、ジェームズは再び乱暴な扱いをするようになり、結局子猫と仲良くなれずに終わってしまう。「乱暴でかわいくないただの醜い猫」だと語る息子に対し、最後に父は「それならお前の前から見えないところに連れて行こう」と子猫をジェームズから取り上げるのである。

J.アボットは上述の前書きでも記していたように、子どもの道徳的感性における親の影響を非常に重視しており、「銃を持ち出して」動物を攻撃する父ではなく子猫を優しく扱う父親を描き出す事はまさにそうした作者の意図を忠実に表した父親像と言えよう。しかしこうした動物愛護の直接的模範となる父親像だけでなく、次に取り上げるように、小動物や植物をさりげなく語る父親像も多数見出せる。例えば *Rollo Learn to Read* には、「ハエの朝の散歩」と題するたわいのないハエのエピソードを語る父親の話が登場する。その物語は、「大きな薄い羽と二つの良く見える目を持った丸い体をした」一匹の小さなハエが、朝食を求めてさまざまなところに飛んで行き試行錯誤で食べ物を探し出す様子が、ハエのその良く見える目を通して映し出されたように詳細にしかも臨場感あふれる表現で語られるのである。何か食べられそうなものを見つけたときに「これは食べられるのかな？」と言いながら「長い口先で味見」をし「ダメダメダメ、これは違う」と飛び回り、最後に子どもが落として行った砂糖菓子にたどり着くという幼児向けのエピソードが、父親の語りで描かれている。¹¹



図2 Rollo's Gardenの挿絵より

ロロシリーズのRollo's GardenやCaleb in Townでは、庭にまつわるストーリーで父親が登場する。Rollo's Gardenでは、父親が幼い息子を連れて散歩に出かけ、農家を訪れて庭で育てる植物の種をもらうエピソードから物語が始まっている。その物語では父親は毎年春になると種を買いに農家を訪れるとされており、庭で植物を育てる父親が暗示されている。物語は父親が庭の世話をするのではなく、感化を受けたロロが父から庭の一部を分けてもらいさまざまな植物を育てる様子が語られていき、庭の手入れを通して忍耐と勤勉さを学ぶストーリーとなっている¹²。

他方、Caleb in Townでは、ボストンに転居してきた少年カレブが庭のない生活の中で水を入れた容器の中に「自分の庭」を作るエピソードで父と息子がその小さな庭を通して心通わせる場面がある。カレブは庭がない事を母に嘆くと母から容器に入れた水の上に綿を浮かべて種をまく「フランネルガーデン」づくりを提案される。その自作の小さな庭にさまざまな種を並べて大喜びをしていたある日、その「フランネルガーデン」を見せられた父親は、そこにレーズンや砂糖漬けされたマルメロの種などが並べられているのを見つけ、それらひとつひとつの種の説明を息子に語る微笑ましい物語となっている¹³。

父親が虫や植物や庭について語る姿は、自然に親しむ機会を父親を通して子どもに提供する意味を持つ。たとえその読み物が父親を介さず読まれていたとしても、その物語に父親が登場させることで子どもの自然観察に父親の介在が可能となるのである。こうした父親が動物や自然の情報提供者になる意味の考察については、さらに次に取り上げる同時代の父親向け助言本での動物や自然史についての考察と合わせて行いたい。

3. 自然・動物を語る父親—父親向け育児書からの考察

19世紀前半期から父親向けの育児書Father's Bookおよび家庭向け雑誌Dwight's American Magazineなどを執筆刊行していたセオドア・ドワイト (Theodore Dwight, Jr., 1796-1866) は、積極的に父親の家庭でのあり方について発信していた。子育ては母親の役割とするメッセージが多数出されていた中で、ドワイトは、父親の家庭の中での役割をどのように捉えて提示していたのであろうか。それについてはまずFather's Bookの前書きに以下のように明確に表されていることに着目したい。

(この本で私は) 父親に子どもに最良の習慣を—身体的な習慣から思考や感情、話す事における習慣に至るまで、一身につけさせるよう助言する。…(中略)…子どもの世話は母親が大部

分を担っているが、父親も自分の義務や影響力を過小に評価しないよう注意深くあるべきだ。…中略…子どもの為に新しい努力を行うことは、自らの義務であると自覚すべきである。¹⁴

19世紀の中産階級の家庭では父親が家庭の外での経済活動を担うとされ始めていたが、ドワイトはそれを父親の育児に対する役割の消滅とは捉えていない。むしろ父親の育児に関わる時間が減少することを警戒し、この前書きではさらに次のように記している。

どの父親も子どもの教育などに参加する時間的余裕などないと思いがらこの本を閉じ、この問題を忘れ去ってしまう前に、次の言葉を考えて頂きたい。—朝寝している時間の30分を育児に使えば一年では大きなことを成し遂げられるということ。食事の間のほんの短い時間でも教育に時間を割くことは、子どもにとってだけでなく、親自身にとっても有意義なことである。¹⁵

しかもドワイトは、父親の子育て参加を、子どもの幼いうちにできるだけ早くから実行すべきであることも次のように記して、家庭での子どもの早い段階での教育の必要性を父親たちに語りかけている。

多くの父親たちが子どもの教育について語り始めるのは子どもがグラマースクールに入学してからだ。しかしそれ以前にも教育は大切である。習慣が形成され、ものの見方が吸収され感性が日々育成されて行く。正しい手本がないと間違った方向へ行ってしまう。¹⁶

父親たちへの積極的な子育て参加を呼びかかるとこの父親向け助言本は、16章で構成され教育の原理と題される章から幼児の扱い方・子どもの健康・宗教教育・子どもの遊び・家族の統制・知性の教育など内容も多岐に渡る。再版の際に加筆された序文にもあるように「家庭の父親に子どもの教育のための原理と方法を、知的教育、道徳、および宗教的真理について提示する」ことを目的とした、まさに父親に向けた包括的育児書である。

家庭向け書物が多数出版された19世紀において、育児書は母親向けが主流であったが、父親向けの育児書はドワイトによるもの以外にも複数出版されていた¹⁷。しかし男性による育児書の中で動物への配慮や動植物および自然について言及しているものはそれほど多くはない。ドワイトはこの育児書の他にも *Dwight's American Magazine* という若い家族を対象とした雑誌を刊行しており、その中においても多数、動植物について取り上げている。すなわち彼の著作は、家庭、父親、動物、自然の交差する文脈で著された言説の分析から当時の「父親」の表象を考察するのに不可欠の史料と考えられる。そこでまず、この育児書の特徴を把握する為に、父親と子どもの関係の捉え方が現れる「家族の統治」と題される章について取り上げておきたい。

子育てにおいては母親がその役割の大部分を占めるようになったという言及が上記の前書きにも見出されたが、それは19世紀の「近代家族」の規範が多く語られる以前からの「伝統」ではない。⁷ 上述したように、植民地時代とくにピューリタンの家庭では子どものしつけは父親が中心に行うことが提唱されていた。そのしつけは父親の権威が重視され、子どもは強い父権の行使によって初めて正しく導かれるものとされていた。そうした古い子育ての習慣を想起させるような「家族の統治 (“Family Government”）」という章は、以下のような表現が示すように、植民地時代の子育てとは全く異なる内容になっている。

家族の統治について、力に頼る人もいれば、愛情に頼る人もいるだろう。計画なしの人もいれば計画を何度も変更する人もいるだろう。その時々自分の感情に任せる人もいるかもしれない。いくつかの大切な点をここに提示する。子ども自身が持つ能力は、時として大人より優れていることがある。正しいことと間違っただけの区別を付ける力は彼らの理解の範疇にある。子どもの持つ、物事の真実の性質を認識する力は驚く程である。¹⁸

この記述に示されているように、ドワイトは、幼い子どもに対して大きな信頼を置いており、それとは対称的に大人に対しては、家庭に対する態度も無計画、あるいは気分任せの姿勢を指摘しているように高い評価をおいていない。例えば「かんしゃくを起こして手に負えない子ども」がいても、その子どもは「父親がそうしていたのを見た」ことで、すなわちそれまで見てきたことに影響されただけであり、その子どもの生得の問題ではないとする捉え方を提示し、子どもを生まれながらに善なる存在と捉える見方を提示している¹⁹。そうした上で「父親がすべき世話」は、「喉が渇いたら井戸に連れて行き、水をくみ上げる方法を教えれば、それにより子どもはどの渇きをいやす方法に気付く」であろうから、その井戸の場所とその水の汲み方を教えることに例えられている²⁰。

父親の役割は、のどが乾いた子どもに水を飲む方法を教えることであり、飲んで乾きをいやし喜びを感じるの子ども自身である、従って親ができることは「純粋の水の風味と同じ程度のことである」すなわち殆どないに等しいと述べ、「家族の統治」に対する無力性を念押ししているとも取れる表現が用いられているが、これは体罰を用いて子どもを制御しようとすることに対する見解が述べられた箇所である。罰を与える時の方法や注意事項が詳細に記述され、体罰がいかに無意味であるかを説き、子どもの本来持つ生得の可能性を最大限大切にすることを打ち出していることが読み取れる²¹。

育児に対する「強権的父権の行使」の否定とも言うべき姿勢が記されたこの父親向けの育児書は、決して放任を意味するのではなく、盛りだくさんの多方面に渡る助言を満載している。ここではそれらアドバイスのうち、動物や自然に関連する記述が登場する「子どもの健康」「宗教教育」「子どものスポーツ、娯楽」および「知性の教育」について取り上げる。父親の子育てにとって、動物や自然との関わりがいかなる意味をもっていたか考察してみたい。そこには当時女性作家たちによって執筆されていた母親向けの育児書での「動物愛護の提唱」に共通するメッセージもあれば、それらには見られない「自然史の知識の伝達者」としての父親像が読み取れる。

ドワイトが父親たちに向けて発信した動物に対する子どもの態度についての助言は、「子どもの健康」「子どもの遊び」などの項目で次のように明確に語られている。例えば「子どもの健康」と題する章では、父親も母親同様、子どもの健康に十分配慮することの必要性を説いた上で「植物、動物、漁場や水車、農業の道具や仕組みなどについて学ぶことは子どもの健康な成長に必要である」としてさらに次のように記している。

8 魚釣りや射撃、その他生命を破壊することに関連する行為には親は反対するよう私は助言する。子どもは生来、動物に痛みを与えることに怯むものである。それが大人になるにつれ、それを自分の中に抑制し忘れ去ってしまうのだ。子どもが、悪い例に誤って導かれ非情な行為をおかすこと程、残酷なことではない。²²

「子どもの遊び」の章では「言うまでもないことであるが、動物虐待につながる遊びや処刑ごっこなど不道徳な娯楽は反対しなければならない」として、さらに次のように具体的に動物虐待への注意深く厳しい態度を助言している。

家禽や家畜の世話をさせることは、子どもの喜びの種となる。動物の習性に馴染むこととなる。…中略…幼い時から動物や家禽に触れさせることが動物虐待の防止である。自分より弱い動物を軽視したり苦しめるようなことをスポーツにして子どもにさせるなど、子どもが行う蛮行を考えると心が痛む。これらに対するいかなるアプローチも惜しまず防止する努力をしたいものだ。最良の方法は、子どもたちの成長の早い段階で家畜や家禽に親しませることだ。子どもたちはすぐさま動物への慈しみを体感するであろう。子どもたちの思考が動物の要求することや動物の性質に向けられ、動物が何を喜んで何をいやがるかを子どもたちは学ぶであろう。それらを通して人道的感情が育成されるのである。²³

こう詳述するドワイトは、郊外の田園地帯に住む家族に対して子どもたちに農具を持たせて遊ばせることを推奨している。「農民は動物虐待を最もしない人々であり、動物の苦痛に一番最初に気付く人々である²⁴」からだという。また田園地域以外の家庭に向けては次のように動物の扱いについて助言をしている。

鳥をかごに入れたり、動物を不必要な拘束状態におくことはしないよう、力説したい。またそうした光景を子どもたちが見た時には、そうした拘束行為に対する非難の言葉なしに見過してはならない。そうした行為は自然に対する暴力であり、人間の足に拘束の鎖をしたり地下牢に閉じ込めて友人たちから切り離すことと同じ位に悪であり不幸を生み出すものであることを、子どもたちに教えなければならない。²⁵

この父親向け育児書には、女性作家たちによる育児書に多く見られた動物に愛情深く接する動物愛護教育のような形は取られていないが、かごに鳥を入れて飼うなどの生き物の自由を奪う行為への戒めは家庭向け雑誌 *Dwight's American Magazine* の紙面にも登場する。そこでは動物を食料や衣料に利用する為に捕獲する「わな」などについては「鳥や動物を捕獲する為に考案された手段に認められる技術は何とすばらしいことか」と述べて積極的承認を表明しながら「鳥をかごに入れて眺めることは、最も頻繁に見受けられる残虐行為である」として強く非難している。

鳥の自然な力は羽を広げて空中を飛ぶことでありそれによって喜びと健康が得られるのである。自由の拘束は、苦痛に満ちた不安を与え病を引き起こす。たとえ広いスペースで十分な餌を与えたとしても、寄生虫に苦しめられ病気になり死ぬであろう。…中略…人道の教えは自由に空を飛ぶ鳥から学ぶべきである。²⁶

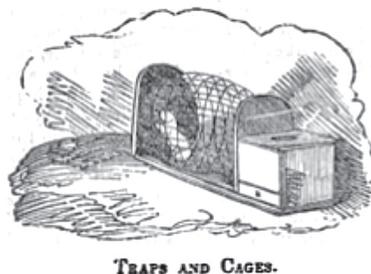


図3 *Dwight's American Magazine*挿絵より

動物への虐待行為を予防することが子どもの人道教育に重要なものとして捉えられていることは、こうした記述から十分読み取れるが、彼が虐待と見なすのは、動物を自然の状態から切り離すこと、あるいは家畜や家禽などの場合には拘束状態におくことなどを含むことにも注意したい。動物に苦痛を与えないという人道の教えは、その動物が本来ある「自然の状態」から学ぶべきというのが彼の伝えたいところだと考えられる。これは、次に取り上げるように、「自然史 (natural history)」と当時呼ばれた動植物をはじめとする自然の知識を、積極的に子どもたちに提供するよう父親たちに勧めていることにも深いつながりがあるものと思われる。

ドワイトは、上述したように父親が子どもの教育に関わることをできるだけ早い段階から行うことを勧めているが、その方法として食事の時間にテーブルで子どもたちに語って聞かせる話の重要性を説いている。その会話で選ぶ題材として動物をはじめとして地理、天候、土壌、植物、鉱物などについて取り上げることの重要性を次のように論じている。

子どもは近所の庭や野原などについて描写でき、動物や樹木や花など、そこに存在するものについて考えるようになる。その後それから子どもの視野は広がり、散歩で目にする野や庭に存在するものについて注意深く観察するようになる。²⁷

こうした子どもの身近なものからの関心の広がりに対し、父親が適切な知識を与えていくことの重要性と有効性についてさらに次のように記している。

父親は、息子に自然についてさまざまな知識を与えるべきである。植物学、鉱物学、動物、鳥、魚、昆虫や貝などの科学についての知識を少しでも多く持つことは子どもの精神に十分な活動機会を与えるであろう。スケッチをさせる、あるいは散歩をしながら語ることは有効である。²⁸

子どもたちが身の回りに存在する昆虫や動物や鳥から関心を広げ、それがさらに大きな関心へと広がって「子どもの知りたがる合理的トピックについての何千もの問い」に対し、父親が答えていくとき、ドワイトは、「次のようなことに気付くことを期待する」として、自然を語る父親の育児における目的について論じているところを見つけることができる。

我々が（自然の知識を提供し）植物や動物の支配者になった時、その奥に存在するもっと深い重要な事柄に気付いてほしい。それは知るべきものの中で最も偉大で最も価値のあること、すなわち人間について知ることである。君たちは魂 (soul) を持っている。それは他の何よりも興味深く探求すべきものである。鉱物や植物、動物について学ぶとき、それらの上に何かがあるか、もっと学ぶべきなのである。²⁹

- 10 自然や動物についての知識を持つことのドワイトのこうした位置づけが読み取れる箇所は、他にも「宗教教育」の章において「科学者のように好奇心に従って観察したり実験したりして豊富な知識を持つ父親」について取り上げ以下のように論ずるところに見出せる。

人間の精神や心についての学問に比べると、動物の習慣や魚や鳥の名前や性質は、それほど重要ではない。しかし親がこれらのことについての知識を持つことに関心を持つのはそれほど不合理なことではない。鉱物や植物や動物の性質に、何か注目し値することがあるとすれば

それは、人間の身体がはるかにもっと価値があることを教えてくれることであろう。なぜなら人間の身体は我々が入手できるものの中で最も完璧なものであるからだ。³⁰

子どもに動植物やその他身の回りの自然に関心を持たせ、子どもの好奇心を満たして行く役割を父親に説きながら、同時に身の回りの自然の仕組みを知ることは人間の偉大さに気付かせるためであると説くドワイトの育児書からは「人間の偉大さを子どもに教える壮大な父親像」が見えてくるのである。

動物や自然を語る「父親」の表象—むすびにかえて

以上取り上げたような「父親」の表象は、19世紀前半期のアメリカ社会の中でいかなる意味を持つであろうか。ここでは3つの点から論じてみたい。

まず第一に、「子猫を愛情をもって扱う父親」の表象は、「きめ細やかで優しい男性像」の発信として見ることができる。J.アボットの著作の中に登場した「ハエの散歩」を語る父親像の描写も、これまでの家族史で影響力を持っていた「合理的で実利的」父親像とは正反対の表象である。男女の役割分業とその領域化が議論されてきた家族史研究では、「公の領域」で家計の主たる担い手として経済活動に従事する父親像が、男性を「攻撃的で激しく、合理的な特質を持つ性」と捉える研究に大いに影響を受けたとされる³¹。こうした「男性」像とはまさに対極の「父親像」が子ども向け書物の中で描かれていたことが映し出せたのではないか。

二点めは、植民地時代とは異なる子ども観に立った上での父親に対する育児の勧め方である。動物への乱暴な扱いを戒めるメッセージはアボットの子猫の馴化を試みる父親の表象でも読み取ることができるが、ドワイトの父親向け育児書には、さらに明確に動物虐待に対する警戒が提唱されていた。しかしその記述を注意深く読み取ると、そこには子どもは生来、動物への痛みに対し敏感な感性を持つ者と捉える見方が現れていた。子どもを道徳的に劣ったものと捉えて正しい方向に力で矯正しようとする父権の行使を意図する「植民地時代の父親」とは大きく異なり、むしろ大人が見せる悪い行いからの影響を戒めるものであったことに注意したい。ドワイトのこの育児書は、子どもを生来正しい方向に向かって生まれてきているとする捉え方に立った上で父親に子育て参加を促す書であることが明確にわかる。

三点めに注目したいのは、ドワイトが育児書の中で自然や動物など身の回りの生き物について知識を提供することを父親に勧めていることの意図である。ドワイトは、決して自然科学の専門家でもなく、自然礼賛を勧めているわけでもない。むしろ「その（動植物や自然の）上に立つ人間のすばらしさを伝えるべきである」と提唱していた。子どもの身の回りに存在するものに関心を持たせる行く先には、そのすばらしい動物、植物、鉱物、人工物その他あらゆるものの上に人間が君臨することに気付かせよと言っていたのである。自然や動植物を語る父親は、人間のすばらしさに気付かせる教育的指導者として「父権」を保たせる意図がそこには読み取れるのではないだろうか。

以上、19世紀前半期の家庭向け書物を取り上げ、そこに記述されていた「父親」を動物や自然の関わりを中心に取り上げ、そこから読み取れる「父性」について論じた。この作業は、アメリカの動物愛護の思想が、「近代家族」の規範の中で提唱され浸透していたと見る立場から、これまでの家族史研究でも取り上げられてきた家庭向け書物を、これまで議論されて来なかった「動物」や「自然」をキーワードとして分析を試みる本稿筆者の一連の研究テーマである。従来の家族史研究で「父親」が研究視点からもまた扱う史料の記述の中からも周辺化されていたといわれる中で、しかもその家庭向け書物の主要テーマでもない「動物」や「自然」を分析の手がかりにすることで出

される成果にどれほどの価値があるのかと問われるかもしれない。しかし、むしろ見落とされていた「父性」の読み直しには、これまで重視されて来なかったテーマ設定も有効なのではないだろうか。

註

1. 父親について取り上げた最近の主な研究には以下のものがあげられる。Steven Mintz, *A Prison of Expectations: The Family in Victorian Culture* (New York: New York University Press, 1983); E.Anthony Rotundo, *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era* (New York: Basic Books, 1993); Robert L.Griswold, *Fatherhood in America: A History* (New York: Basic Books, 1993); Stephen M. Frank, *Life with Father: Parenthood and Masculinity in the Nineteenth-Century American North* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1998); Shawn Johansen, *Family Men: Middle-Class Fatherhood in Early Industrializing America* (London and New York: Poutledge, 2001)
2. 植民地時代の家族史研究で父権についての主なものには以下のものがあげられる。Edmund Morgan, *The Puritan Family: Religion & Domestic Relations in Seventeenth-Century New England*, Rev.ed. (New York: Harper & Row, 1966); John Demos, *A Little Commonwealth: Family Life in Plymouth Colony* (London: Oxford University Press, 1970); Philip Greven, *Four Generations: Population, Land, and Family in Andover, Massachusetts* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1970)
3. Mary P. Ryan, *Cradle of the Middle Class: The Family in Oneida County, New York, 1790-1865* (Cambridge, England: Cambridge University Press, 1981), p.232.
4. Johansen, pp.3-4.
5. Carl N. Degler, *At Odds: Women and the Family in America from the Revolution to the Present* (New York: Oxford University Press, 1980); Mary P. Ryan, *The Empire of the Mother: American Writing about Domesticity 1830-1860* (New York: Institute for Research in History and Haworth Press, 1820)
6. Ryan, *Cradle of the Middle Class*, pp.67-71.
7. Johansen, *op. cit.*
8. Jacob Abbott, *Mary Bell: A Franconia Story* (London: George Routledge and Co., 1854), pp.v-vi.
9. Jacob Abbott, *Rollo: Learn to Read* (Boston: Philips, Sampson & Co., 1835), pp.111-116.
10. *Ibid.*, pp.152-166.
11. *Ibid.*, pp.96-101.
12. Jacob Abbott, *The Rollo Story Books: Rollo's Garden* (New York: Sheldon & Co., 1857)
13. Jacob Abbott, *Caleb in Town* (Boston: Crockers and Brewster, 1839), pp.139-152.
14. Theodore Dwight, Jr., *Father's Book or Suggestions for the Government and Instruction of Young Children, on Principles Appropriate to a Christian Country* (Boston and New York: G. and C. Merriam, 1835) p.vii.
15. *Ibid.*, p.viii.
16. *Ibid.*, pp.131-132.
17. 詳しくはFrank, *op. cit.*
18. Dwight, *Father's Book*, p.119.
19. *Ibid.*
20. *Ibid.*, 130.
21. *Ibid.*
22. *Ibid.*, pp.50-51.
23. *Ibid.*, p., 104.

24. *Ibid.*
25. *Ibid.*, p.105.
26. *Dwight's American Magazine, and Family Newspaper*, Vol.III No.2 (March 20, 1847), p.184.
27. Dwight, *Father's Book*, p.157.
28. *Ibid.*, p.105.
29. *Ibid.*, p.141.
30. *Ibid.*, p.67.
31. Talcott Parsons et al., *Family, Socialization and Interaction Process* (Glencoe, IL: The Free Press, 1955) quoted in Johansen, pp.7-8.

(受理 平成28年9月20日)